『西洋束髪秘傳』

文化学園大学准教授（日本ファッション文化論、ファッション・メディア史担当）　田中　里尚

『西洋束髪秘傳：附化粧秘傳』（以下『秘傳』と記す）は、明治19（1886）年1月に出版された翻訳書である。翻訳者は伊藤重固、閲読者は東京大学教授の櫻井省三、校正者は山成哲造である。伊藤の出生生没は不明だが、『算学』と題されたブレスト造船所職工学校の教科書の翻訳を山成の校正で、明治11（1878）年に横須賀造船所から出版している。その「凡例」に「我横須賀造船所ニ於テ職工生徒の教則ヲ改正スルノ挙アルニ当リ此書ヲ訳シテ其教科書ニ供スベキノ議アリ乃チ熊谷直孝等ニ命ジ之ヲ訳セシム余も亦其末員に列セリ」（引用に際し漢字は新字体に改め、ルビも適宜省略する）とあるように、幕府から明治政府へ移管された横須賀造船所に勤務していた人物だったのではなかろうか。櫻井もまた、明治10（1877）年7月に「造船学為修業」にフランスへ留学を申しつけられており、当時造船所の「生徒」であったことは確認できる。したがって、この三者は横須賀造船所の中で知り合い、後年抄訳の依頼を何らかの形で受け、刊行におよんだのではなかろうか。

『秘傳』はフランスの著述家「路易達爾克（るいーだるく）夫人」の書から、髪型と化粧の項のみ抄訳したものであると「序」において説明されるが、原本情報は記載されていない。原著者はMme Louise d'Arq（本名Alquié de Rieupeyroux, 1840-1910）と推定されるが、国立国会図書館蔵の『秘傳』著者の項にはLouis Claude Douët D'arcq（1808−1883）と書かれており、議論は分かれる。大きさは19×13cmで、定価は60銭と記載され、出版元は博聞社である。

幕末に結んだ不平等条約を改正するために、この時代には国内の習俗を西欧風に改めることで交渉を進展させようと、外務卿井上馨（かおる）により欧風化政策が推進された。明治16（1883）年ごろより、その傾向は明瞭となり、様々な分野に西欧化の風が吹いた。

女性の髪型も例外ではない。医師の渡邊鼎（かなえ）と「東京経済雑誌」記者の石川暎作らは、従来の結髪習慣に対し、不便・不潔・不経済と批判した。彼らは明治18（1885）年6月に「婦人束髪の会を起こす主旨」を発表後、「婦人束髪会」を結成し、束髪改良運動を起こす。この運動のうねりと並行して、『秘傳』は刊行されたのである。

次に内容を見よう。『秘傳』の構成は大きく「束髪部」と「化粧部」に分かれる。「束髪部」は「頭髪の療法」「束髪の自製法より其の諸器械」「各種束髪の束ね方」「髢（かもじ）の自製法」の4章に分けられると「緒言」は述べるが、内容面から見ると、頭髪管理法を述べた部分と結髪法を述べた部分の二つに分割できよう。

図版は25点におよび、年齢や場面に適合する束髪、束髪用の付属品、髢、髢を用いた束髪、髢を用いない束髪法などが図解されている。さらに、訳者による付録として明治18（1885）年4月の『Le Salon de la Mode』に紹介された「新式束髪」を前後面から描いた図版も2点掲載されている（図1はそのうちの1点）。ちなみに、明治21（1889）年に加藤正七方から刊行された同内容の書籍『西洋女装考一名化粧秘伝』では図版はすべて削除されており、その意味でも明治19年度版は貴重である。

さて「頭髪の療法」部においては、頭皮、頭髪の維持法と洗浄法についての知識が記されている。

ここでは「髪の脱落」と「繁殖」に焦点があてられる。例えば、著者は単に毛髪を短く刈っておくことが毛髪の強化にあたるという説の弊について論じたのち、毛髪の脱落の原因として、「夜の冷気」と「空気の流通」が妨げられることを挙げている。この二点は、矛盾するようにも見えるが、過度に地肌が冷気にさらされないようにすることと、髪を洗浄において清潔に保ち、「密櫛」で「一週に一回梳(くしけず)る」ことは適切な毛髪の維持法として矛盾していない。また、髪の「繁殖」法としては、「髪の性質を視て」アンモニア水など種々の薬品を用いることを推奨している。ただ、「脂気多き沾潤質の髪」は例外とする注意も忘れてはいない。

「束髪の自製法およびその諸器械」「各種束髪の束ね方」部においては、図版参照の指示がその都度記され、懇切な解説がなされている。そして「今諸君に伝授へ参らせんとする束髪は貴賤共に用いて妨げなし」として、民主的な立場から指南を行っているのが特徴である。

例として、第5図（図2）の「水製波紋形(みづせいなみがた)」の束髪法を紹介しよう。「髪を甚だしく潤したる後前頭帯様髪（頭の前部なる髪を二つに大別して左右に垂下し恰(あたか)も帯様をなすもの）を人々の好みに応じて縦線に若干条の小帯様に分け支那風に髪を束ねる有様にて此の帯様髪を引揚げ之を顔の方に傾け若くは顔に倒るるに至しめ然後髪の端より顔に向ひ疎櫛を透し其の髪を一様の大きさに広げ小帯様髪の端を頭上に上せて適意の波紋を作るべし」と順を追って具体的に解説がなされている。加えて、それぞれの束髪に合う年齢、場面、顔の形状、髪の太さなどが記されており、第5図の髪型は「霖雨又は暑熱の時候に宜し」とされ、「四十歳前後の婦人にして性来太き髪のものに宜し」と指南されている。

「化粧部」においては、皮膚の涵養に役立つ知識が披露されている。集中的に書かれているのは、顔の「健康」を「保持」するための「薬剤」の紹介、およびその製造法である。しかし、化粧品と化粧法についての言及はない。なぜなら原著者自身が「染顔術(かほをそむるじゅつ)」を「此の術は俳優の舞台顔に施して大に看客の眼を喜ばすことあれども之に用ふる薬剤は概ね皮膚を毀(そこな)ふのみならず又衛生上に大害あるを以て予は決して此の術を世の婦人に勧めざるなり」として批判的立場をとるからである。しかし、「人々は修飾を好む性質を具(そな)ふるは亦自然の理」として「最も有効無害」な頬紅、口紅、頭髪をより黒くする染髪剤、「染睫墨(まつけそめずみ)」「書眉水(まゆをえかくみづ)」の製法は解説されている。こうした方法を実践できた人々は多くはないと思われるが、束髪と化粧に関する考え方を提供した書籍として理解すると興味深い。

『秘傳』の翻訳刊行と「婦人束髪会」の関係性は定かではない。しかし、『秘傳』の「緒言」において洋髪は「経済衛生の二点に益あるは勿論其の束ね方も格別苦難に渉らずして徒に時間を費すの患なし」と述べられ、「開明の今日に於て外国の女粧を研究せんと欲する婦人に極めて有用の書」と位置づけられていることから、この抄訳に込められた教育的意図は「婦人束髪会」の活動と通底するだろう。

近代以降の日本は海外の文物を見聞や翻訳によって消化し、知的国力を向上させてきた。本書もその実践として理解されるべきであろう。

図1　踏舞の新式束髪前面
上杉熊松写

図2　水製波紋形束髪
尾瀬田良恭写